

26 電話に出た古墳時代の「ひとみさん」

当館のテーマ展示「人」のコーナーには、ある一人の女性が開館当初からずっといらっしやいます。その方のお名前は「ひとみさん」。

本名はわかりませんが、私たちが勝手にそう呼んでいます。

ひとみさんは今から約1,700年前の古墳時代前期に、朝来市和田山町でご活躍されていました。もちろん今はお亡くなりになり、骨になってしまっています。



ひとみさんの展示

「ひとみさん」とお呼びするようになったきっかけは、今から約30年前、ひとみさんのお墓である向山2号墳（朝来市）を発掘していた時のことです。

兵庫県に就職が決まってまもない頃の私は、初々しく、はしゃぐように発掘をしていました。調査が進むと、古墳は一辺10mほどの方形であることが明らかになり、その中央からは大きな墓穴がみつかりました。墓穴を掘り進むと丁寧に組んだ石の蓋が出てきました。



丁寧に組まれた蓋石

図と写真による記録をとり、慎重に蓋を外しながら中をのぞくと、、、

中には人骨が残っていて、目と目が合い（目はないけどそんな気がした）、ドキッとしたことを今でも憶えています。

ひとみさんのお墓はベンガラで真っ赤に塗れた竪穴式石室で、意図的に割られた中国製の内行花紋鏡が枕元に、2本のヤリガンナ（木を削るカンナ的一种）が肩の辺りに置かれていました。



ひとみさんの埋葬の様子

石室の外には2つの土器が供えられ、玉砂利が石室周辺と棺内に敷かれていました。手厚く葬られていて、地域の人々から信任され、愛されていたことがわかります。



赤く塗られた石室と供えられた土器

発掘調査で人骨が出土すると、形質人類学がご専門の大学教授に現場を見ていただき、年齢、性別、身長、その他の身体的特徴を教えてください。

ひとみさんの調査の時も先生に連絡をとり、現場まで見に来ていただきました。すると、「この方はきゃしゃで、美人さんですね。例えるなら、黒木瞳さんのような方です。」とのお言葉。

この時から、私たちはこの方のことを「ひとみさん」と呼ぶようになりました。先生のお話によると、ひとみさんは

①40～60歳の熟年女性

②身長は約150センチ

③虫歯があり、生前に上の左右の第2小臼歯と多くの大臼歯が抜けていたということがわかりました。

.....

さてさて、発掘調査も無事終了し、ひとみさんが現場事務所に安置されていた時のことです。事務所を留守にし、皆でお店を予約して出かけることになったのですが、発掘作業の都合で出るのが遅くなってしまいました。

お店に到着すると、お店の人が待ってて、こう言いました。

(お店の人) 「あんまり遅いので、電話したんですよ。そうしたら女の子の人が電話に出て、皆さんもう出られました、と言われたので待ってました。」

(私) 「あれ？ 事務所には誰もいないはず…。電話に出た人はどんな人でしたか？」

(お店の人) 「50代くらいの女性の声でしたよ」

事務所で働く人にそんな人はいません。今、事務所にいるのは、確か、、、

まさか、ひとみさんが電話に？！

不思議に思ったり、気味悪がったり、電話番号を間違えたからと真面目に原因を追及したり。反応は人によって様々でしたが、私はこう思いました。

残念。私なら電話でいろんな話を聞いたのに、、、。

村には何人の人がいたのか。何人家族で、どんな暮らしだったのか。なぜ、鏡を割ったのか。虫歯が痛むときはどうしたのか。などなど、、、。

さてさて、電話に出たのは本当にひとみさんだったのか？ 今となっては真相を明らかにすることはできません。

みなさんも、展示室のひとみさんに、直接話しかけてみてはいかがでしょうか？
むかしのことをいろいろと教えてくれるかもしれませんよ。

(学芸課 中村 弘)



意図的に割られた中国製の鏡
(小型の内行花紋鏡)